

K-554

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第59集

大浦A遺跡 発掘調査報告書

平成10年3月
1998

米沢市教育委員会

大浦A遺跡
発掘調査報告書

平成10年3月
1998

米沢市教育委員会

序 文

本報告書は、平成8年度に発掘調査を実施した、「大浦A遺跡」の結果をまとめたものです。

大浦遺跡群の発掘調査は、昭和59年の大浦C遺跡を皮切りに、今回の調査まで12回を数えます。これらの一連の調査によって、奈良時代の置賜郡衙跡と推定されており注目されている遺跡でもあります。

今回の調査は、店舗の新築に伴うもので、開発事業者のご理解を得て緊急発掘調査を実施したものであります。今回の調査では調査面積が小範囲であったにもかかわらず、奈良、平安時代の遺構・遺物等が検出されたことで、大浦遺跡群の全容が少しずつではありますが解明されつつあり意義深いものがあります。

最後になりましたが、調査にあたって、ご協力を賜りました日本プロシード（株）、地元の皆様に対し、衷心よりお礼申し上げます。

平成10年3月30日

米沢市教育委員会
教育長 相田 實

例　　言

1 本報告書は、平成8年度に実施した大浦A遺跡の緊急発掘調査報告書（米沢市埋蔵文化財調査報告書 第59集）である。

2 調査は米沢市教育委員会が実施した。

3 調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名　大浦A遺跡（米沢市遺跡No.244）

所　在　地　米沢市中田町11-7

調　査　主　体　米沢市教育委員会

調　査　期　間　平成8年8月19日～同年9月10日（現地調査 延14日）

調　査　総　括　舟山豊弘（文化課長）

調　査　担　当　手塚 孝

調　査　主　任　月山隆弘

調　査　參　加　者　穴沢茂雄　五十嵐三郎　井上吉栄　梅津治朗　菊地芳子　木村省三

　　木村芳浩　斎藤光子　佐藤裕子　中島国雄

事　務　局　長　小林伸一

事　務　局　山本 卵 平間洋子

調　査　指　導　文化庁 山形県教育庁文化財課

4 出土遺物・調査記録類については、米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山200）に一括保管している。

5 本書の作成・執筆・編集は月山隆弘が担当し、全体については手塚 孝が総括した。

6 日本プロシード（株）、コマツ（株）、パワーステーション、（有）内山農機商会、関係各位の協力を得た。記して感謝申し上げます。

凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は、HY—竪穴住居跡、BY—掘立建物跡、TY—柱穴、DY—土壤、AZ—土器を示す。挿図内の●は出土地点を示す。

2 挿図の縮尺は、各挿図毎にスケールで付した。図版の縮尺は適宜示した。挿図と図版の番号は同一である。

3 方位は真北を示す。

本文目次

第Ⅰ節 遺跡の概要

1 遺跡の立地と環境	1
2 調査の経過	1

第Ⅱ節 検出遺構

1 I期の遺構	3
2 II期の遺構	8
3 III期の遺構	8
4 近世の遺構	12

第Ⅲ節 出土遺物

1 A群土器	13
2 B群土器	15
3 C1群土器	15
4 C2群土器	15
5 D群土器	18
6 E群土器	18
7 F群土器	18
8 G群土器	18
9 H群土器	18
10 I群土器	18

第Ⅳ節 まとめ	22
---------------	----

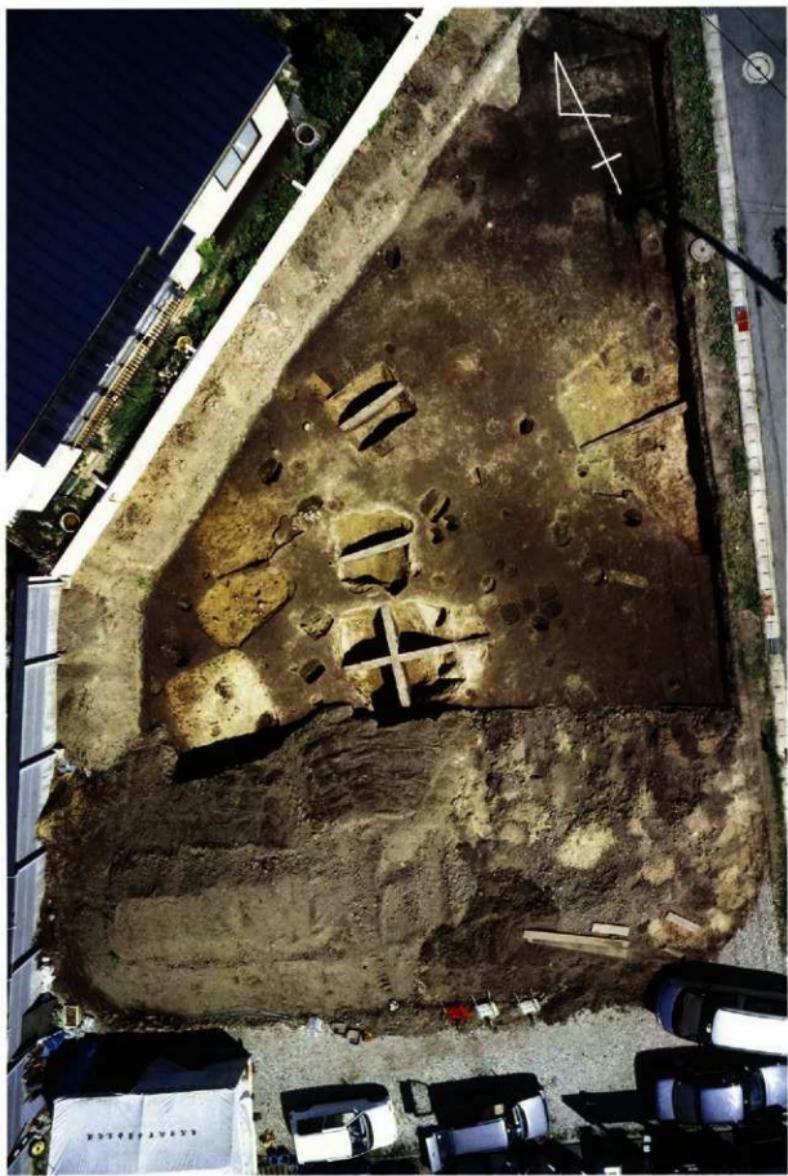
参考文献	22
------------	----

挿図目次

第1図 大浦遺跡群位置図	2
第2図 大浦A遺跡遺構全体図	4
第3図 大浦A遺跡遺構変遷図	5
第4図 H Y 1・10竪穴住居跡平・断面図	6
第5図 B Y 9 挖立建物跡、H Y 5 竪穴住居跡平・断面図	7
第6図 B Y 7 挖立建物跡平・断面図	9
第7図 B Y 8 挖立建物跡平・断面図	10
第8図 D Y 2～4 土壙平・断面図	11
第9図 大浦A遺跡出土遺物実測図(1)	14
第10図 大浦A遺跡出土遺物実測図(2)	16
第11図 大浦A遺跡出土遺物実測図(3)	17
第12図 大浦A遺跡出土遺物実測図(4)	19
第13図 大浦A遺跡出土遺物実測図(5)	20
第14図 大浦遺跡群遺構変遷図	21

図版目次

卷頭図版	調査区全景
第一図版	遺構検出状況
第二図版	H Y 1 竪穴住居跡、H Y 5 竪穴住居跡
第三図版	B Y 9 挖立建物跡、H Y 10 竪穴住居跡
第四図版	B Y 9 挖立建物跡、B Y 7・8 挖立建物跡
第五図版	D Y 3 土壙、D Y 6 土壙
第六図版	D Y 4 土壙、D Y 4 土壙遺物出土状況
第七図版	調査風景
第八図版	出土遺物(1)
第九図版	出土遺物(2)
第十図版	出土遺物(3)



調査区全景（上空から）

第Ⅰ節 遺跡の概要

1. 遺跡の立地と環境

大浦遺跡群は、市街地から北東約2kmに位置し、米沢市中田町字大浦他の標高234～236mに所在する。本遺跡が存在する大浦地区一帯は、吾妻山を源とする最上川（松川）と、羽黒川、それに堀立川が合流する地域の北西部にあたり、発達した河岸段丘に立地している。北側にはかつての堀立川の旧河川の小川が流れおり、遺跡はこの小川と河岸段丘に挟まれた自然堤防との範囲内に、奈良時代を主体とする大浦A・B・Cの3遺跡と、小川の対岸の北西側を中心として分布する大浦D遺跡が存在し、大浦遺跡群全体では東西約300m、南北約100mの範囲に存在する。大浦A遺跡は、標高約235mの堀立川で形成された河岸段丘上に立地し、河川との比高差が約4mを測り、東西約70m、南北約50mの範囲に分布する。

大浦遺跡は、昭和59年の（大浦遺跡群第1次調査）大浦C遺跡を皮切りに、その後、圃場整備、宅地、店舗、駐車場等の開発や、学術調査に伴い過去12回の発掘調査を実施している。

この中で大浦遺跡群の重要性を裏づけたのが、当遺跡の道路を挟んですぐ北側にあたる大浦B遺跡であり、平成元年に実施した大浦遺跡群第4次調査（大浦B遺跡第1次調査）である。この調査で、南門を有した一辺39m×46mの方形に区画する柵列内に、整然と配置された奈良時代の建物群と漆紙文書が検出された。建物群は8世紀中葉から同後葉期と、8世紀後葉期から同末期の二時期にわたって存在していた。また漆紙文書は、延暦23年（804）の具注曆であることが判明している。このようなことから、大浦遺跡群は奈良時代における置賜郡衙の有力な候補地と推定されている。

2. 調査の経過

今回の調査は、店舗の新設に伴う緊急発掘調査であり、大浦遺跡群としての発掘調査は12次調査となる。大浦A遺跡としての発掘調査は、今回が第3次調査にあたる。

平成8年6月に本市教委に当遺跡の開発の連絡が入った。遺構の密度を把握するため、本調査以前の平成8年6月10日に、幅2m×長さ8mの試掘トレーニングを、東西2本、南北1本の計3本を設定し確認した結果、表土下約40mにて黄褐色シルト（地山層）が確認された。また開発予定地南側を除くトレーニング内から、柱穴等の遺構や土師器、須恵器等の遺物が検出したこと、開発者と本市教委が協議した結果、開発予定地の調査対象面積約600m²のうち、遺構が分布する北側を中心に、南側を除く約400m²部分について緊急発掘調査を実施することに至った。

本調査は平成8年8月19日から開始し、重機によって表土剥離を行った。表土剥離と並行して面精査整理を8月21日まで行った。その結果、住居跡や土塙と判断される遺構や、土師器、須恵器片等が多量出土した。8月23日には遺構の確認をほぼ終了し、プラン確認後遺構の掘り下げを順次進めた。8月24日から竪穴住居跡や、近世の遺構の掘り下げ、また並行して遺構の平面図作成を並行し、8月28日から断面図作成、8月31日に現地説明会を開催し、9月4日に空中写真撮影を実施し、9月10日で現地調査を終了した。



第1図 大浦遺跡群位置図

調査箇所

第Ⅱ節 検出遺構

今回検出された遺構には、竪穴住居跡（3棟）、掘立建物跡（3棟）を中心に、土壙（1基）他に不明柱穴（64基）、近世の土壙（2基）等があり、計73基確認されている。これらの遺構は重複関係や出土遺物からⅢ期に分けられ、Ⅰ期は8世紀前半から中葉期、Ⅱ期は8世紀中葉期、Ⅲ期が8世紀後から末期と判断される。以下、主要遺構である竪穴住居跡、掘立建物跡を中心に、Ⅰ期からⅢ期に分け、規模、形態、構造などについて概述する。

1. Ⅰ期の遺構

Ⅰ期の遺構は前述のように、8世紀前半から中葉期であり、官衙の成立期以前の時期と判断される。竪穴住居跡3棟を確認している。以下、それぞれ述べる。

H Y 1（竪穴住居跡）「第2・7図 第1図版」

調査区の南西側コーナー部に確認された。平面形は、ほぼ方形を呈す。東西3.0m、南北3.2m、深さ25~28m測る。住居跡は浅いことから上部は削平されているものと推定される。掘り方はほぼ垂直に掘り込んでおり、底面はほぼ平坦である。壁柱穴は確認していない。住居跡の覆土は2層に区分される。出土遺物には、若干の土師器、須恵器片が認められたが復元可能なものはない。時期は、大浦遺跡群では初期の8世紀中葉から末頃、奈良時代末の所産と判断される。重複関係は、B Y 8 掘立建物跡のT Y 33に切られる。

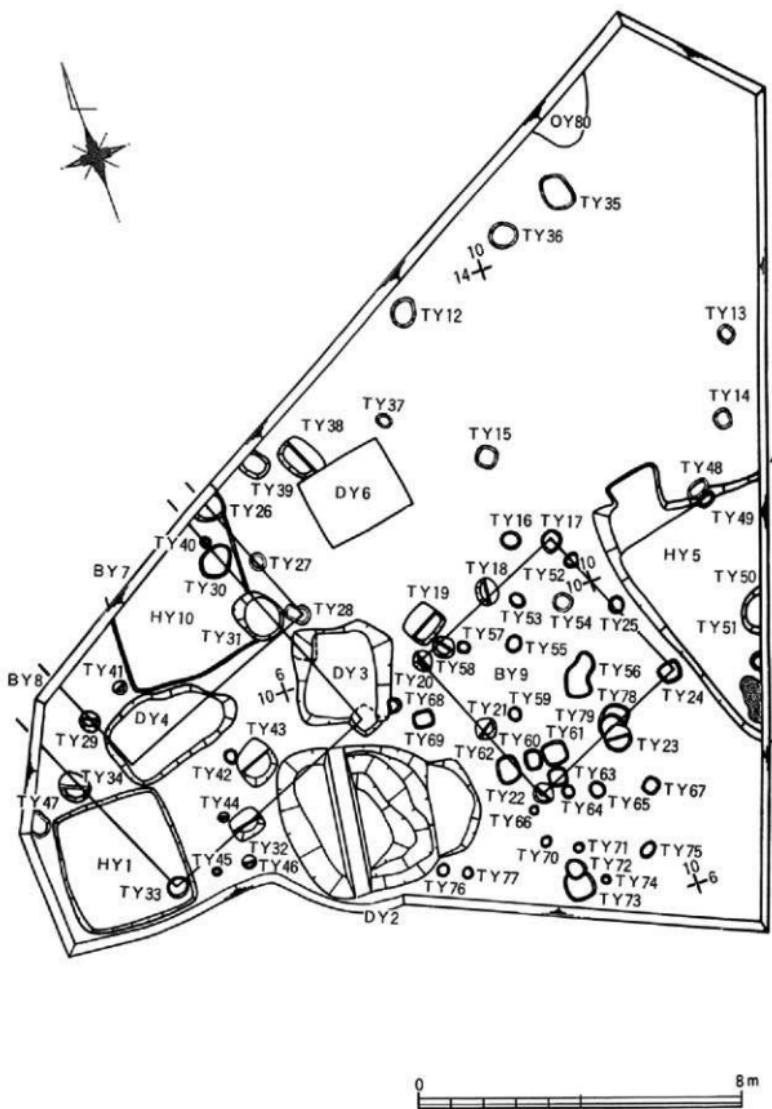
H Y 5（竪穴住居跡）「第3・7図 第1図版」

調査区の東側中央部に確認されたが、東側は調査区外であることから未確認である。平面形は方形を呈すものと推定される。東西（2.2m）、南北（3.0m）、深さ20~25m測る。掘り方は東壁で確認しており、基本層序のⅢ層直下からほぼ垂直に掘り込んでいる。底面はほぼ平坦である。住居跡の覆土は7層に区分される。南側で埋土の上面（1層）に厚さ約10mの焼土が確認されているが、この焼土は竪穴住居跡が機能していた後の時期と判断される。出土遺物は内黒土師器、須恵器片が認められた。時期は、H Y 1同様、初期の8世紀中葉から末頃、奈良時代末の所産と判断される。北側でT Y 48・49柱穴と重複関係に切られる。

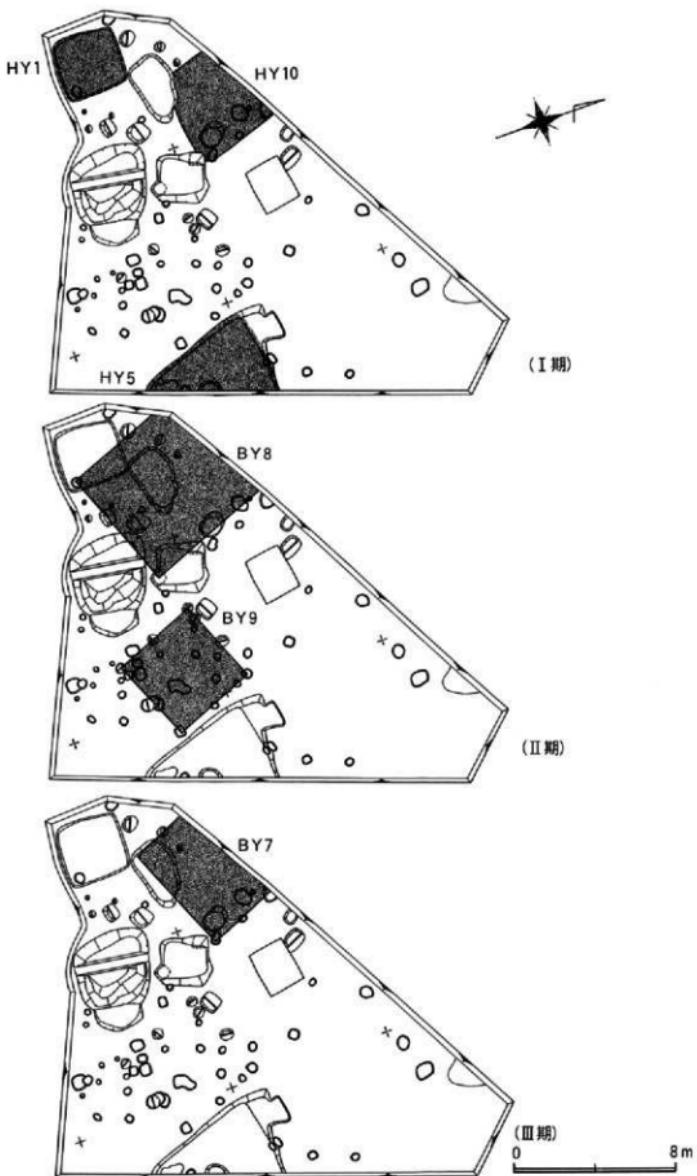
H Y 10（竪穴住居跡）「第2・7図 第2図版」

調査区の南西側に確認されたが、西側は調査区外であることから未確認である。また上部は後世の遺構等に破壊されている。平面形は方形を呈すものと推定される。東西3.5m、南北（3.8m）、深さ20~25m測る。掘り方は西壁から確認され、基本層序のⅡ層直下からほぼ垂直に掘り込んでおり、底面はほぼ平坦である。住居跡の覆土は4層に区分される。当竪穴住居跡には貼床（4層）を施している形跡が認められる。また東側の埋め土には焼土が確認されている。出土遺物は若干の須恵器片が認められた。時期はH Y 1・5と同時期の8世紀中葉から末頃、奈良時代末の所産と判断される。

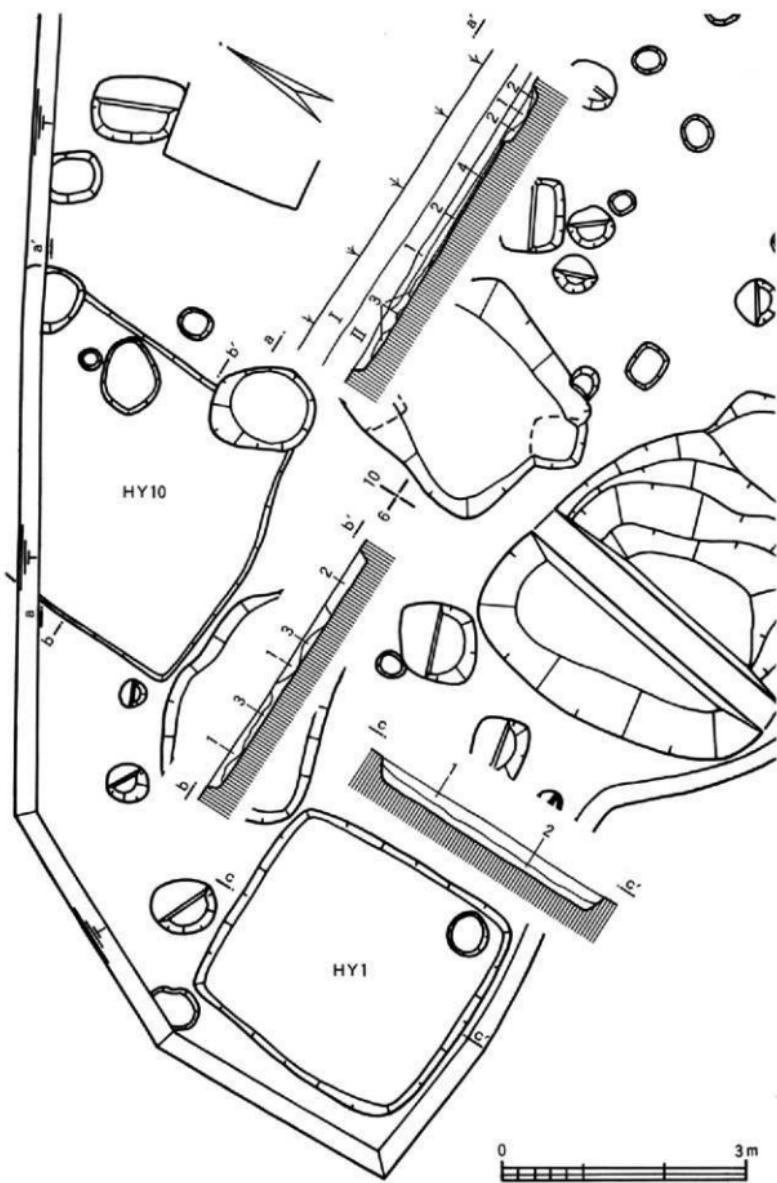
当調査区北側に隣接する大浦B遺跡（平成3年度）の調査では、5棟の竪穴住居跡が確認されており、出土遺物から大浦遺跡群Ⅰ期に属し、官衙が機能している以前の、8世紀中葉以前から存在し8世紀中葉をもって廃絶し、その後、掘立建物跡群に変化すると考えられている。



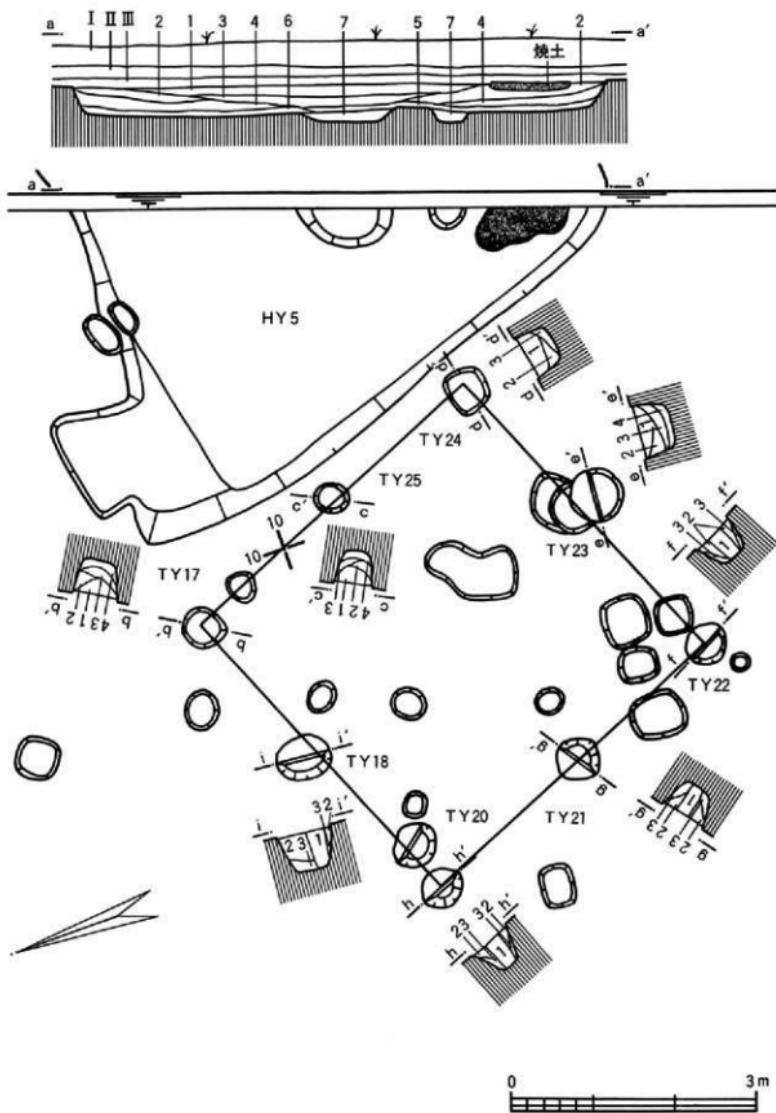
第2図 大浦A遺跡 遺構全体図



第3図 大浦A遺跡遺構変遷図



第4図 HY1-10堅穴住居跡平・断面図



第5図 BY9据立建物跡、HY5堅穴住居跡平・断面図

2. II期の遺構

II期の遺構は、8世紀中葉期と判断される。調査範囲が狭いことや、後世の土壤等に切られていること、また搅乱が著しいことから、掘立建物跡1棟のみの検出であり、建物跡の全容を確認することはできなかった。

B Y 7（掘立建物跡）「第4・7図 第4図版」

調査区の西側に確認された。T Y26・27・28・29から構成された。桁行、南北2間（8尺×8尺）・梁行、東西2間（6尺×6尺）の規模を有する。柱跡の平面形は、円形及び不正梢円形を呈し、径50~65m、深さ25~30mを測る柱穴である。桁行南列はD Y 4に切られており確認されなかった。T Y29には柱痕が確認された。主軸方向（N-10°-W）を示す。柱穴の掘り方はほぼ垂直に掘り込んでいる。覆土は2~4層に区分された。柱穴内部から遺物の出土は認められない。H Y10・B Y 8・D Y 4と重複する。時期は、H Y 1・5・10堅穴住居跡のグループの以後、8世紀中葉期、官衙の成立期の所産と判断される。

3. III期の遺構

III期は、8世紀後葉期から末期と判断される。掘立建物跡2棟とD Y 4土壤1基のみの検出であり、B Y 9掘立建物跡はについては全体を確認することができたが、B Y 8掘立建物跡についてはB Y 7同様後世の土壤等に切られていることから、全体を確認するまでには至らない。

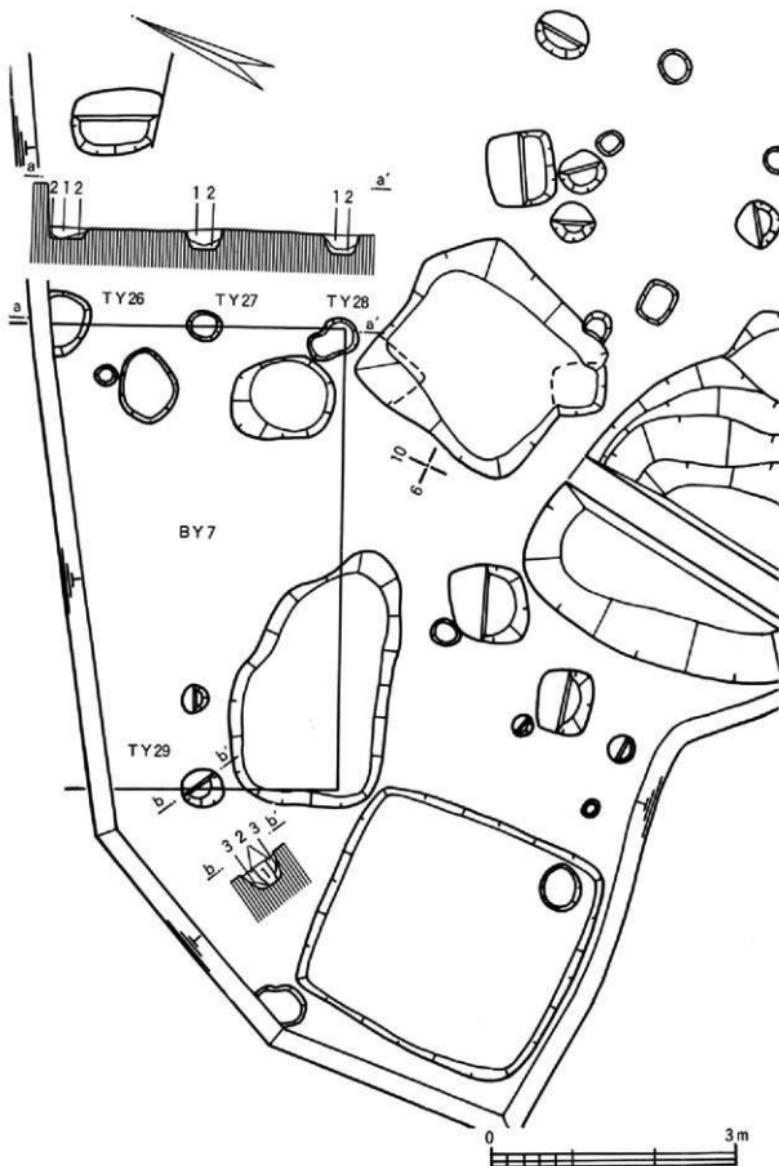
B Y 8（掘立建物跡）「第5・7図 第4図版」

調査区の南西側に確認された。西側は調査区外であることから未確認である。T Y31・31・32・33・34から構成されており、桁行、南北3間（7尺×8尺）・梁行、東西3間（5尺×6尺）の規模を有する。主軸方向（N-12°-W）を示す。柱跡の平面形は、円形や不正梢円及び隅丸方形を呈し、径60~130m、深さ24~30mを測る。桁行東側と重複するD Y 3土壤の掘り込み時に確認されたことであるが、D Y 3の南と北側の縁が微妙に方形に掘り込んでいる痕跡があることから、図の破線で示したように構成されていたものと判断した。掘り方は、ほぼ垂直に掘り込んでいる。覆土は2~3層に区分される。柱穴内部からの出土遺物は認められない。H Y10・B Y 8・D Y 3等と重複する。8世紀後葉期から末期との所産と判断される。

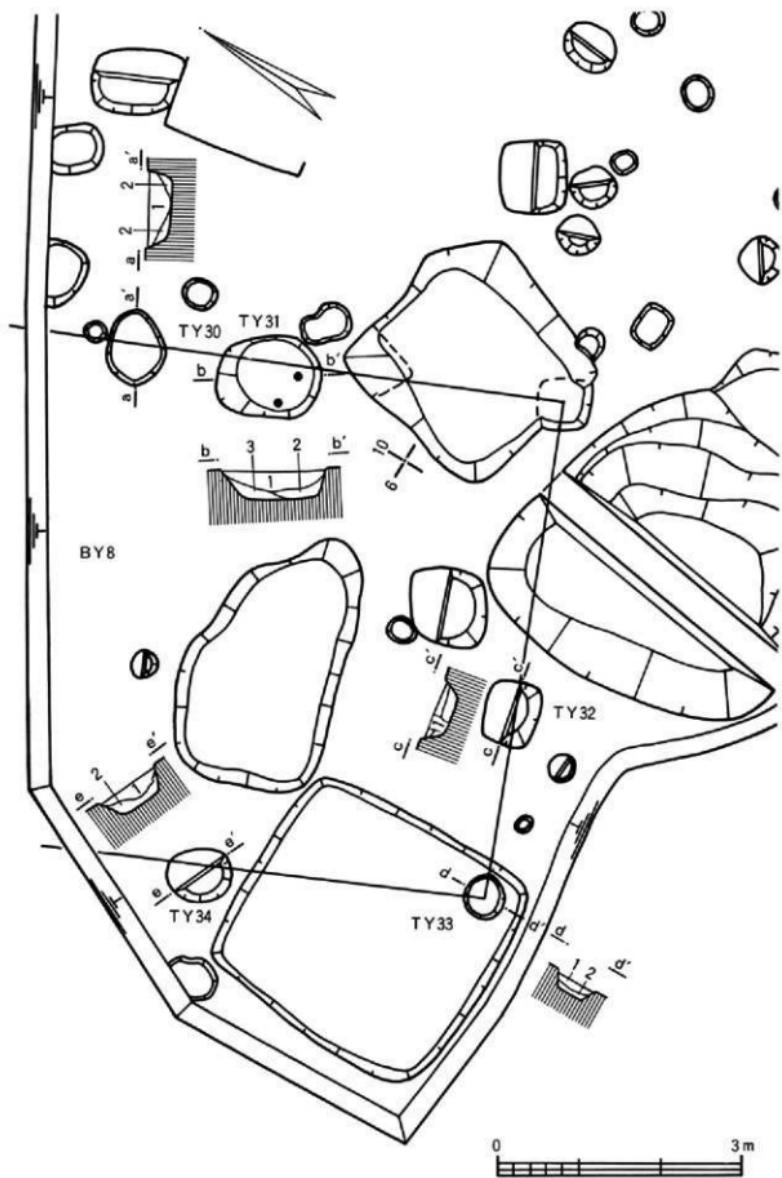
B Y 9（掘立建物跡）「第3・7図 第3・4図版」

調査区の南側中央部、H Y 5住居跡の西側に確認された。T Y17・18・20~25から構成されており、桁行、南北2間（6尺×7尺）・梁行、東西2間（8尺×8尺）の規模を有する。主軸方向（N-12°-W）を示す。柱穴の平面形は、ほぼ梢円形を呈し、径45~65m、深さ40~45mを測る柱穴である。掘り方は、ほぼ垂直に掘り込んでいる。覆土は3~4層に区分され、T Y18・20・21・22から柱痕が確認された。出土遺物は、T Y25から須恵器の残片が認められた。T Y78・79柱穴等と重複する。時期は9世紀中葉、平安時代の所産と判断される。

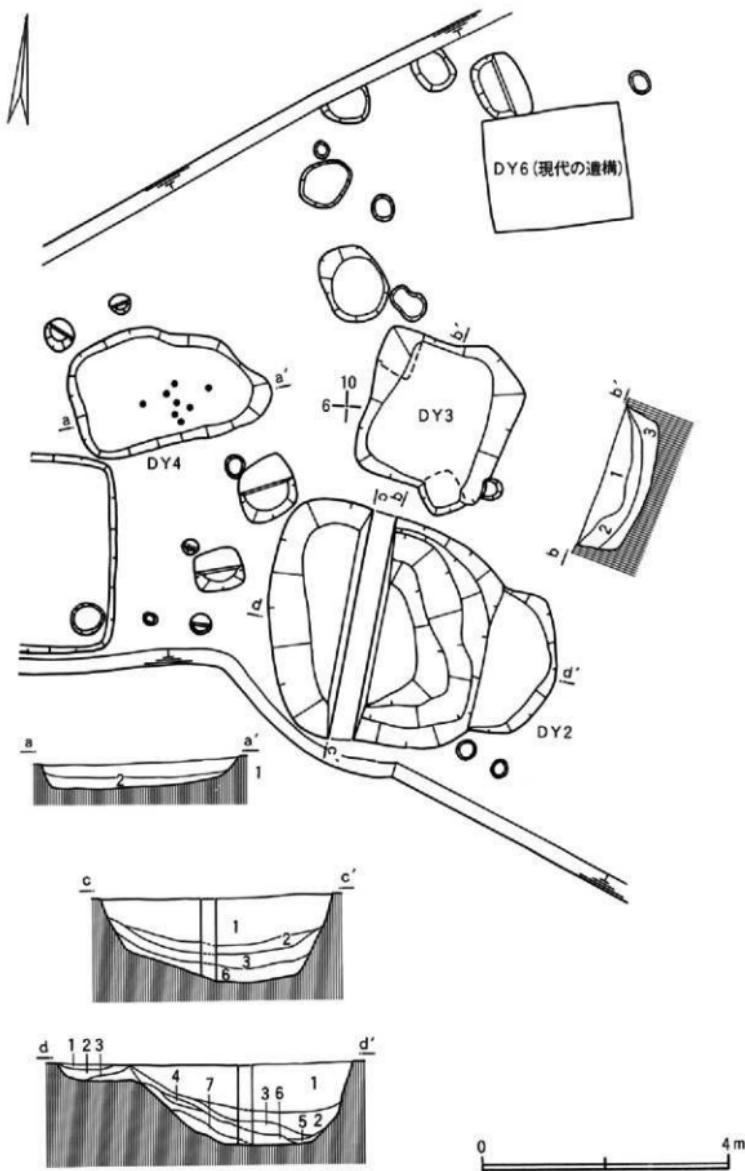
B Y 9付近には柱穴が多く確認されているが、そのほとんどが浅く、建物跡を構成するには至らなかった。



第6図 BY 7 据立建物跡平・断面図



第7図 BY 8 掘立建物跡平・断面図



第8図 DY2~4 土壌平・断面図

土 壤

D Y 4 (土壤) 「第6・7図 第6回版」

調査区の南西側、H Y 1 竪穴住居跡北東に確認された。平面形は西側が隅丸方形であり、東側が不正梢円形を呈す。長短径60~110m、深さ18~25mを測る。掘り方は東側が若干緩やかに掘り込んでいるが、他はほぼ垂直に掘り込んでおり、底面は平坦である。覆土は2層に区分される。出土遺物は、図で示したように土師器、須恵器、赤焼土器等、今回の調査の遺構では一番出土遺物が多い。B Y 7 建物跡等と重複し切る。

4. 近世の遺構

近世の遺構は、大型の土壙状の遺構や小規模な柱穴などが確認されている。柱跡の平面形・深さの規模は、いずれも20m前後を測り建物を構成するには至らなかった。以下、主な土壙について述べる。

D Y 2 (土壤) 「第6・7図」

調査区の南壁側、H Y 1 竪穴住居跡東側に確認された。平面形は不正方形を呈し、長短径4.8~3.8m、深さ約1.30mを測る。掘り方は、西と南側が垂直に近く掘り込んでいるのに対し、東側のみ緩やかに掘り込んでおり、底面は全体的には平坦であるが、中央部から北側にかけて緩やかに立ち上がる。覆土は6層に区分される。出土遺物には、近世の鉄パイプ等がある。重複関係は認められない。

D Y 3 (土壤) 「第6・7図 第5回版」

調査区の南西側、H Y 1 竪穴住居跡東側に確認された。平面形は、西側が隅丸方形であり、東側が不正梢円形を呈すが、全体的には方形で南北が若干長い。径2.35m、深さ約80mを測る。掘り方は、西側が垂直に近く、東側が西側より若干緩やかであり、底面は鍋底状を呈す。覆土は3層に区分される。出土遺物には、近世のものが若干あった。重複関係は、B Y 8 でも前述したとおり、南北側で方形の柱跡が確認されており、B Y 8 が機能し、埋め立てられた後世に当遺構を構築したものと判断した。

D Y 6 (土壤) 「第6・7図」

調査区の中央西側、B Y 1 建物跡北側に確認された。平面形は長方形である。長短径2.3~1.9m、深さ約80mを測る。掘り方は垂直に掘り込んでおり、底面は平坦である。覆土は6層に区分される。出土遺物には、ビニール等があり、近世のゴミ捨て場であった。重複関係はT Y 38 を切る。現代のものと判断したため、遺構断面図等は割愛した。

D Y 80 (土壤) 「第7図」

調査区の北側壁面に確認された。全体は確認できないが平面形は梢円形と推定される。長短径2.3~1.9m、深さ約30mを測る。掘り方は緩やかに掘り込んでいる。底面は平坦である。覆土は6層に区分される。遺物から判断して、近世のゴミ捨て場であった。重複関係は認められない。現代のものと判断したため、遺構断面図等は割愛した。

第Ⅲ節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、Ⅰ期及びⅡ期の範疇にある堅穴住居跡と土壙や、表土剥離時に出土したものであり、土師器（坏203点・甕205点・蓋2点）、須恵器（坏205点・臺甕220点蓋24点）、赤焼土器（坏51点・甕1094点）等、整理箱で約10箱分に相当する。墨書き土器は5点出土している。中世期に属する遺物は小破片であり、数点のみであることから割愛した。以下、大浦B遺跡で分類したものを参照し、土師器と須恵器に大別し実測図化した遺物について概述する。

1. A群土器

土師器の坏を一括した。器形の特徴で6類に分けられる。

A群1類 「第10図2・3・4・8 第8・9図版」（大浦A群5類）

口径及び底部が大きく、器形が低いのを特徴としている内黒土師器である。内面調整は横ミガキ、外面は底部辺を回転ヘラケズリを横位に施している。

3は横位と斜方向に施している。底部の切離し技法は、回転ヘラ切り同ヘラケズリを施している。大浦B遺跡で分類している大浦Ⅰ期に相当し、8世紀中葉の範疇である。

A群2類 「第10図1・5 第9図版」（大浦A群6類）

底辺からの立ちあがりが、緩やか曲線を描く。高径の比率が他の坏に比べ大きいのが特徴である。3の内面は横ミガキ、1は横ミガキと斜方向にミガキを施している。外面は底部辺を回転ヘラケズリを横位に施している。底部切離し技法は、5は回転ヘラ切り、ヘラ調整の内黒土師器である。1は回転糸切り、ヘラ調整を施している黒色処理を伴わない土師器である。大浦のⅠ期に相当し、8世紀中葉から同末葉期の範疇である。

A群3類 「第10図9・10」（大浦A群7類）

高径の比率が大きく、椀形に近いグループの土器である。共に底部が欠損している。内面は横ミガキを施している。9は黒色処理を伴わない土師器であり、外面は底部辺を回転ヘラケズリ、口縁部と底部辺を除いた箇所にはヘラケズリを斜方向に施している。

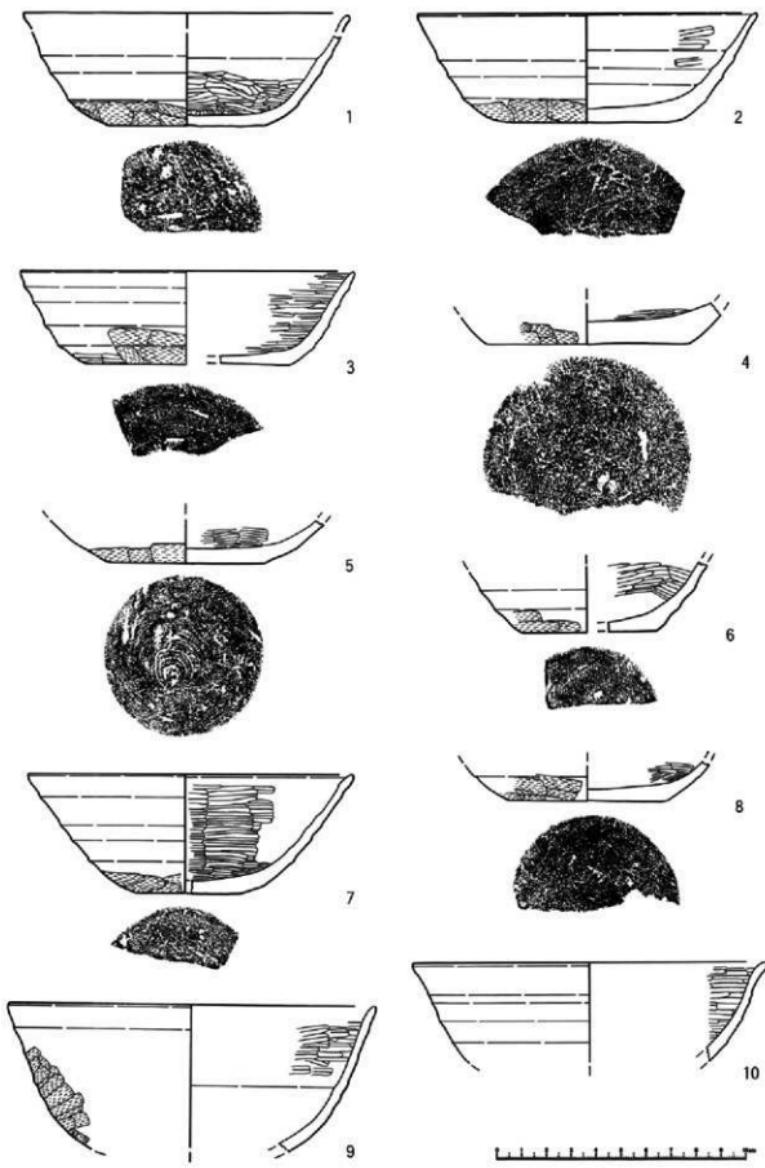
10は内黒土師器である。残存する部分が少ないと磨滅が著しいため、外部の調整は不明である。

A群4類 「第11図12」（大浦A群9類）

底部の高台部分のみの両黒土師器である。器形は、A群6類とほぼ共通し、底辺からの立ちあがりが、緩やか曲線を描く。高径の比率が他の坏に比べ大きいのが特徴である。内外面に、丁寧なミガキを施している。また、高台接続部にもミガキを施している。底部切離しは、回転糸切後回転ヘラ調整を施している。

A群5類 「第11図11」（大浦A群10類）

底部の高台部分のみの内黒土師器である。やや外反する高台坏で、底部が広く高径が低い特徴とする。内面調整はミガキを施している。外面の調整は不明である。底部切離しは、回転糸切後回転ヘラ調整を施している。



第9図 大浦A遺跡出土遺物実測図

A群6類「第11図6・7 第8図版」

6は底部付近のみであるが、底部の口径が小さく、外反がほとんどしないのを特徴とする、内黒土師器である。6の内面調整は、底部から放射にミガキを入れた後、斜方向に強いミガキを施している。外面の調整は底辺部にケズリを施している。底部切離しは、回転糸切後回転ヘラ調整を施している。

2. B群土器

須恵器の坏を一括した。器形の特徴で6類に分けられる。

B群1類「第12図23・24」(大浦B群1類)

双方ともに底部のみの出土である。底部切離し技法は、回転ヘラ切り無調整のグループであり、底部には墨書跡が認められたが、破片資料であるため判読不明。大浦IIa期に相当し、8世紀中葉から同後半の範疇である。

B群2類「第11図17・19 第8図版」(大浦B群8類)

底部切離し技法は、回転糸切り無調整のグループで、底部が広く器高が低い。高径の比率が大きく、底部が凹むのを特徴としている。大浦IIb期の8世紀後半から同末頃の範疇になる。

B群3類「第11・12図20~22・25 第8・9図版」(大浦B群9類)

底部切離し技法は、回転糸切り無調整のグループで、底部が小さく器高が高い。胴部から緩やかに曲線をもちながら口縁部で外反する。21・22の底部には「長」の墨書跡が認められた。B群2類と同様、大浦IIb期の8世紀後半から同末の範疇になる。

B群4類「第11図18 第8図版」(大浦B群10類)

器形は高台坏である。下胴部に明瞭な稜線を有するもので、整型が丹念である。稜線下部には薄く自然渦が認められる。大浦III期の8世紀末の範疇になる。

B群5類「第12図29 第9図版」(大浦B群10類)

器形は高台坏である。底部切離し技法は、回転糸切り無調整のグループで、底部が広く器高が高い。下胴部から口縁部で直線的に立ち上り、口縁部では外反しない。石英粒子が多く含まれている。大浦IV・V期の8世紀末から9世紀初頭の範疇になる。

B群6類「第12図28 第9図版」(大浦B群10類)

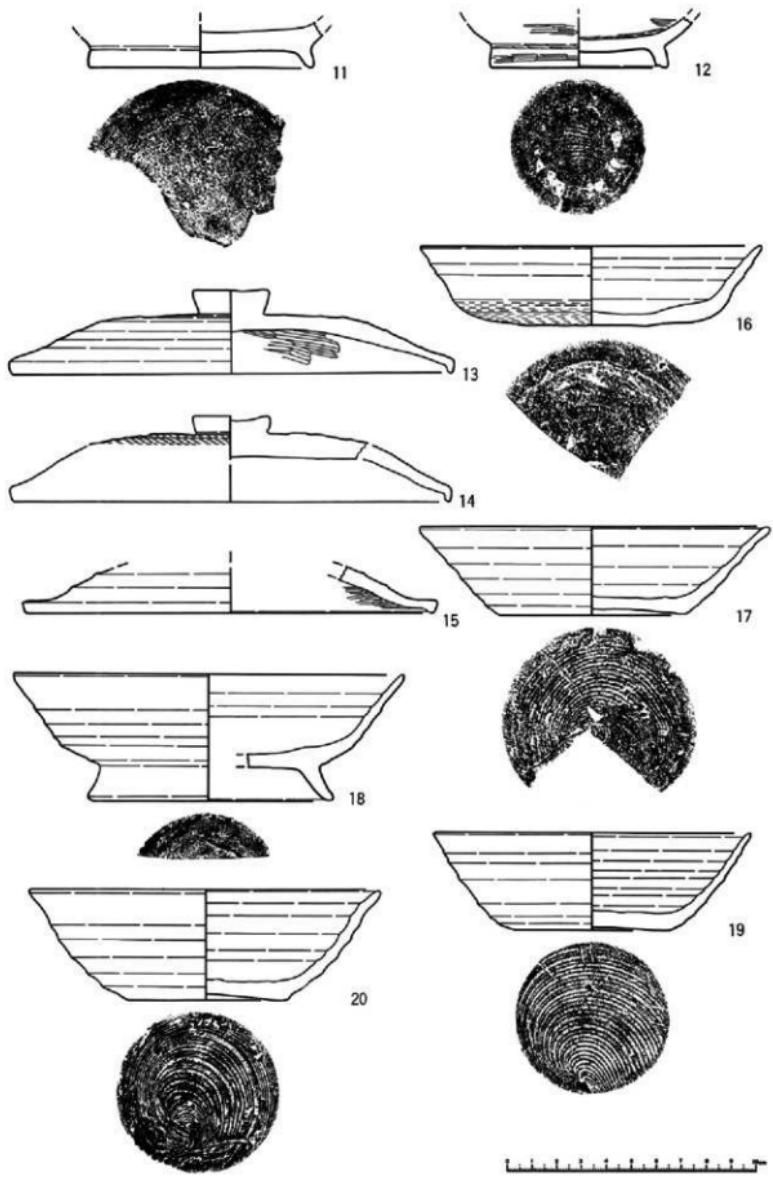
高台部分のみの破片資料であるが、器形は高台坏の盤である。器高が約3cm前後で、口径が20cm以上あり、回転糸切り無調整である。石英粒子が多く含まれている。大浦遺跡群では初めての出土である。8世紀末頃の範疇と判断される。

3. C1群土器「第11図13・15 第9図版」(大浦C群5類)

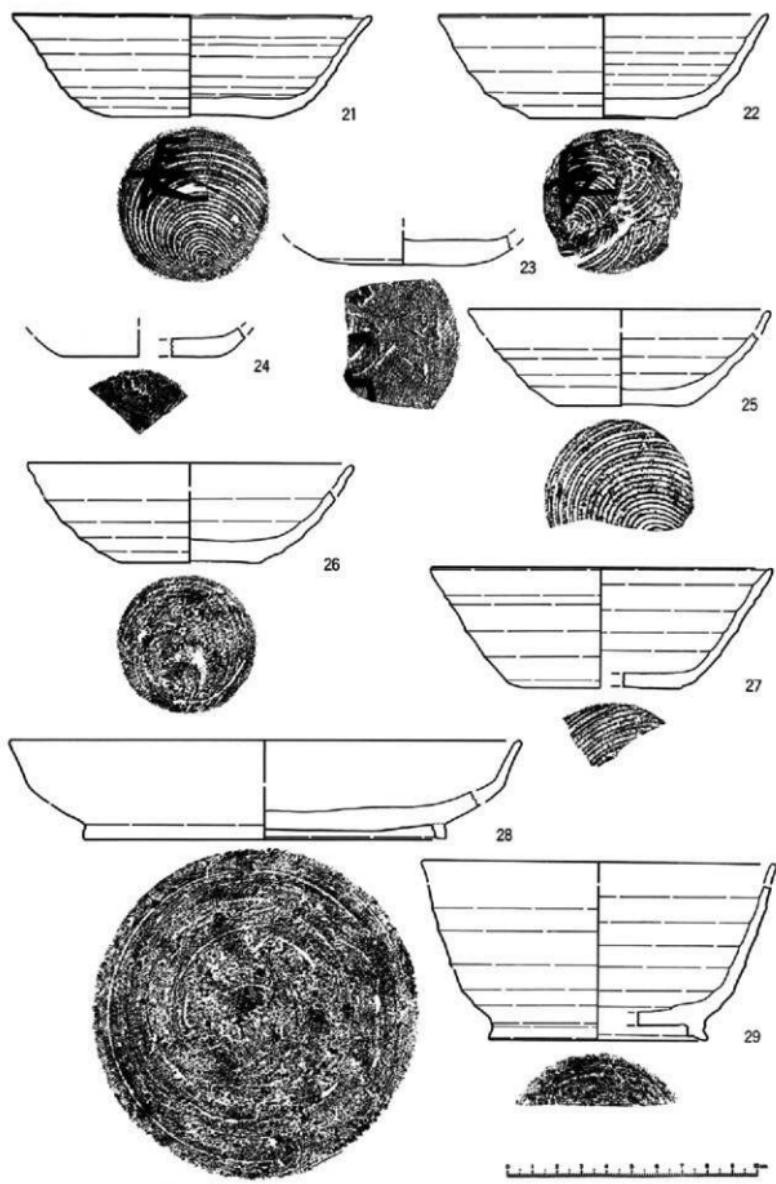
土師器の蓋である。13は、内黒蓋であり内面に丁寧なミガキを施している。15は、両黒蓋で内面に丁寧なミガキを施している。外面にもミガキを施していると思われるが、磨滅が著しいため不明。

4. C2群土器「第11図14 第9図版」

土師質土器の蓋である。土師質蓋であることから便宜上C'群に分類にした。ミガキを伴わないもので、ツマミ部は凹みを呈する。石英粒子が多く含まれている。



第10図 大浦A遺跡出土遺物実測図



第11図 大浦A遺跡出土遺物実測図

5. D群土器「第13図30 第10図版」

土師器の椀が1点出土している。口縁部の破片資料である。器形は、丸底で口縁部付近で大きく外反する。内面に丁寧なミガキを横と斜位に、外面には横位のケズリを施している。赤褐色を呈する栗団式土器であることから、7世紀後半から7世紀末葉期と判断される。

6. E群土器「第14図31~37 第10図版」

土師器の甕を一括した。すべて口縁部の破片資料である。30は口縁部付近で若干外反し、内面には口縁部付近で横位のナデ、胴部にケズリ、外面にもそれぞれケズリを施している。

32は口縁部付近で大きく外反し、口唇部で垂直に近く立ち上がる。内面に横位のナデ、外面にはタタキの後にケズリを施している。8世紀末の範疇である。33は口縁部付近で垂平に近い「く」の字状に外反し、内面には横位のヘラナデ、外面には継位のハケメが施されている。

34・35は口縁部付近で外反し、口縁部が短い。外面には横位のヘラナデ、34の内面はヘラナデ、35の内面には斜のハケメとヘラナデが施されている。36は口縁部付近で大きく外反し、内外面ともにヘラナデが施されている。37は口縁部付近で外反し、口唇部が若干内湾し、内外面ともにヘラナデが施されている。

7. F群土器「第14図45 第10図版」

口縁部の破片資料であり、ロクロ成形の土師器の内傾鍋である。口縁部付近から緩やかに内湾する。内外面には横位の回転ヘラナデと外面にはカキメが認められる。鍋の形態としては、8世紀中葉の範疇である。

8. G群土器

須恵器甕「第14図42~44 第9・10図版」

口縁部の破片資料であり、ともにロクロ成形である。42は口縁部付近で大きく外反し、口唇部が内外に直立する。外面胴部にはタタキ、内面の口縁部付近には横位のハケメ、口縁下部からアテ跡が認められる。43は口縁部付近で外反し、口唇部付近で再び大きく外反し、口唇部が内側にのみ突き出す。外面胴部には回転ヘラナデ、内面には横位のハケメと一部ヘラナデが認められる。44は口縁部付近に櫛搔波状痕が3条認められる。内面の口縁部付近はヘラナデ、口縁下部から胴部にかけてはアテ跡が認められる。

9. H群土器「第12図26 第9図版」

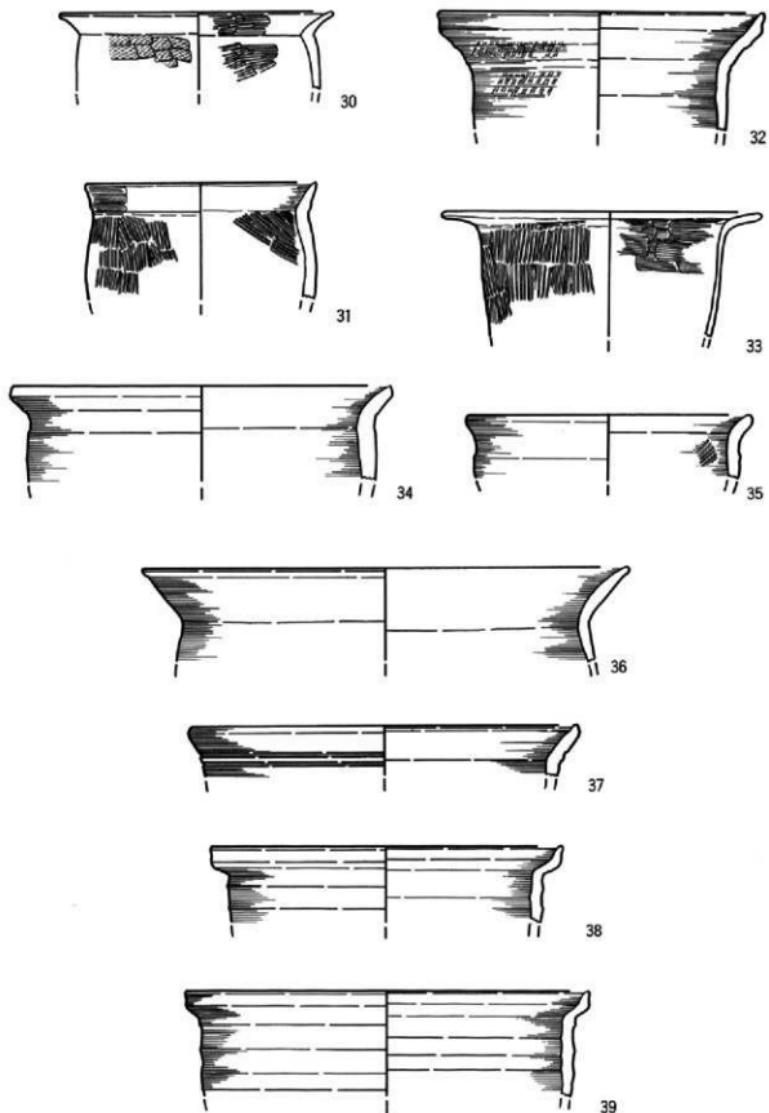
赤焼土器壺である。器形はB群3類と同様、回転糸切り無調整で、底部が小さく器高が高い。外面胴部に墨書き跡の一部が認められた。

10. I群土器

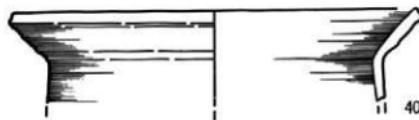
赤焼土器甕「第13図38・39 14図40 第10図版」

すべてロクロ整形である。38・39は口縁部付近で一旦外反し、口唇部で垂直に立ち上がる。40は口縁部付近で一旦外反し、口唇部で垂直に立ち上がる。

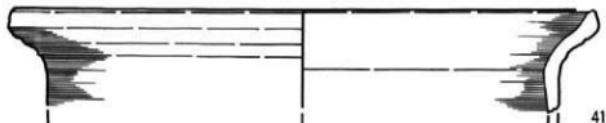
以下、出土遺物の年代については、土師器及び須恵器の壺の底部の切離し技法から、ヘラ切りは8世紀中葉から末期頃で、糸切りは9世紀にかけての頃の範疇とされる。また、土師器甕は8世紀中葉以降土師器 は栗団式から7世紀末の範疇とされる。



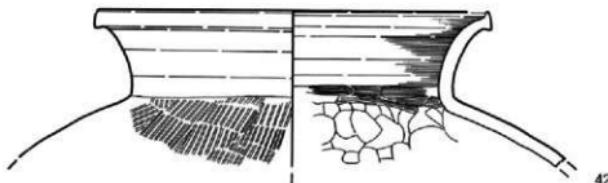
第12図 大浦A遺跡出土遺物実測図



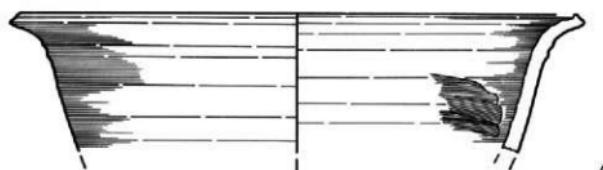
40



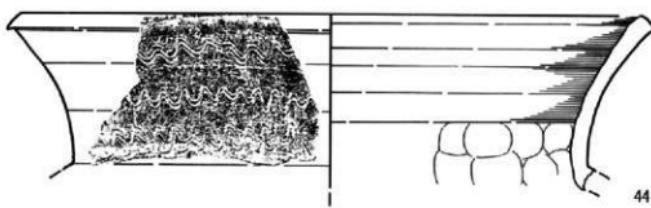
41



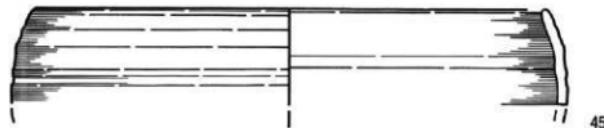
42



43



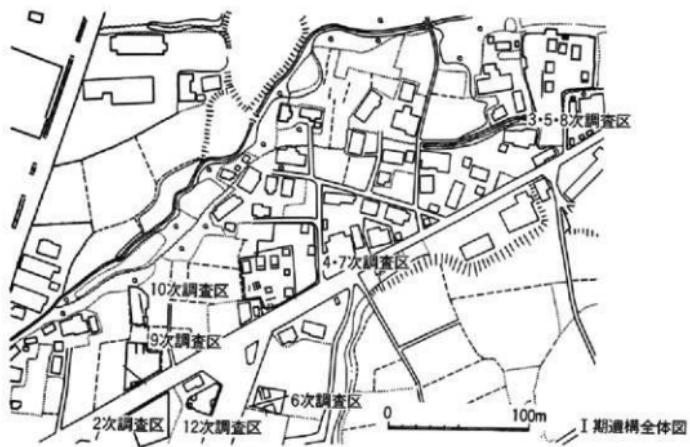
44



45



第13図 大浦A遺跡出土遺物実測図



第14図 大浦遺跡群 造構変遷図

第IV節　まとめ

大浦遺跡はこれまでの調査結果から、古代の官衙跡「置賜郡衙跡」と推定されるもので官衙の中心部「郡庁もしくは正倉」と推測とされる大浦B遺跡をはじめ、厨跡の可能性がある大浦C遺跡、また官衙の外郭範囲を示す柵列跡が確認された大浦A・B遺跡等から、東西約400m、南北約120mの範囲が大浦遺跡の官衙区域と推定している。

官衙は、既に集落として存在していた8世紀前半から同中葉頃の集落を、移転もしくは撤去させて成立し、8世紀中葉から同末頃までの半世紀の期間にわたって機能していたものと推測される。その期間に、2回程度の建て替えが行われている。それらの構造を便宜的に、次のⅠ期からⅣ期に区分してみると、Ⅰ期の構造は、竪穴住居を主体とする集落跡（8世紀前半から同中葉期）、Ⅱ期は官衙の成立期（8世紀中葉期）、Ⅲ期には官衙の発展期（8世紀後葉期から同末期）、Ⅳ期は官衙廃絶後の集落（9世紀初頭から中世期）となる。

今回の調査区は、官衙の中心部の南側に隣接するもので、竪穴住居跡3棟と掘立建物跡3棟に土壌、それに中世期と判断される、柱穴が多数確認された。竪穴住居跡は前述のように、大浦遺跡群が成立したⅠ期の、8世紀前半から中葉頃の範囲であり、以前の大浦B遺跡の調査において7棟確認されており、今回の3棟を加えると10棟となり、比較的大規模な集落を構成していたことが伺える。掘立建物跡3棟のB Y 7は大浦遺跡群Ⅱ期、B Y 8・9は大浦遺跡群Ⅲ期に伴うもので、いずれも官衙の外部施設に属するものと考えられる。

出土遺物としては、土師器（坏・碗・甕・蓋）、須恵器（坏・壺・甕・盤・蓋）、赤焼土器の（坏・甕）などがあり、構造からの出土は土師器と須恵器の坏・甕片が中心である。大浦遺跡群では初の出土となる盤は、官衙以前の集落の段階で使用されたものであり、7世紀末から8世紀初頭に属するものである。また、須恵器の坏底部に「長」（おさ）の墨書き器2点がD Y 4土壙から出土している。この坏は、形態から 笹原遺跡Ⅳ期と並行するもので、8世紀末から9世紀初頭の所産と判断される。「長」は古代の官衙の末端機構である郷「里」の長官などに用いる場合が知られているが、検出状況から推測すると、官衙の廃絶後に成立した集落（郷）に関連するものと考えられる。

今回の調査区の主要建物跡は、これまでの調査状況を加味すると、大浦遺跡（官衙）に密接な係りを有する外部施設等と判断される。

米沢盆地における、古代官衙に関連する遺跡には、本市の笹原遺跡・上浅川遺跡・金ヶ崎A遺跡・大神窯跡、川西町の道伝遺跡、南陽市の郡山遺跡等が知られ、概ね8世紀中葉から9世紀初頭に成立した遺跡であり、今回の調査成果は、古代置賜郡の律令社会を知る上で、貴重な資料を提出したといえる。

参考文献

- 1981 笹原遺跡発掘調査報告書 米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 1986 上浅川遺跡発掘調査報告書 米沢市埋蔵文化財調査報告書第15集
- 1987 大浦A・C遺跡発掘調査報告書 米沢市埋蔵文化財調査報告書第18集
- 1991 大浦B遺跡発掘調査概報第1集 米沢市埋蔵文化財調査報告書第29集
- 1992 大浦C遺跡発掘調査報告書 米沢市埋蔵文化財調査報告書第33集

写 真 図 版

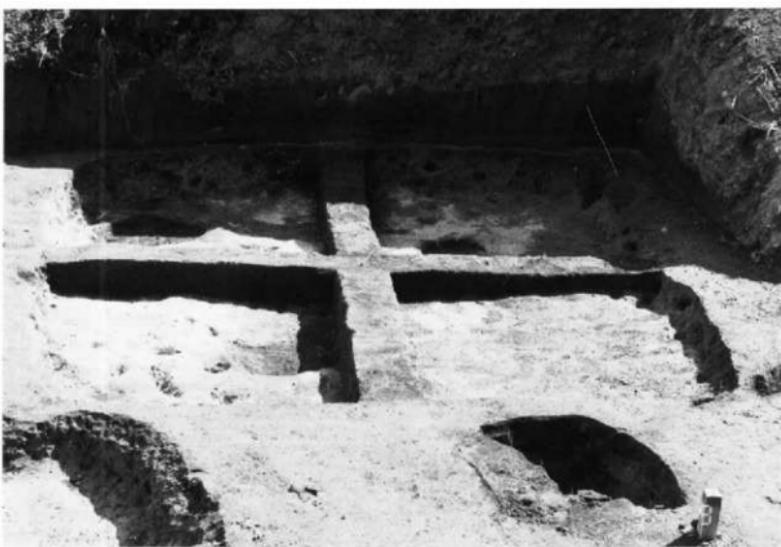
第一図版 大浦A遺跡



▲遺構検出状況（南から）



▲遺構検出状況（南から）



▲HY 1 壺穴住居跡（北から）



▲HY 5 壺穴住居跡（北西から）



▲HY9 挖立建物跡（東から）



▲HY10 豊穴住居跡（南から）



▲ BY 9 掘立建物跡（南から）



▲ BY 7・8 掘立建物跡（東から）



▲DY3 土壌（西から）



▲DY6 土壌（東から）



▲D Y 4 土壌（西から）



▲D Y 4 土壌 遺物出土状況（東から）

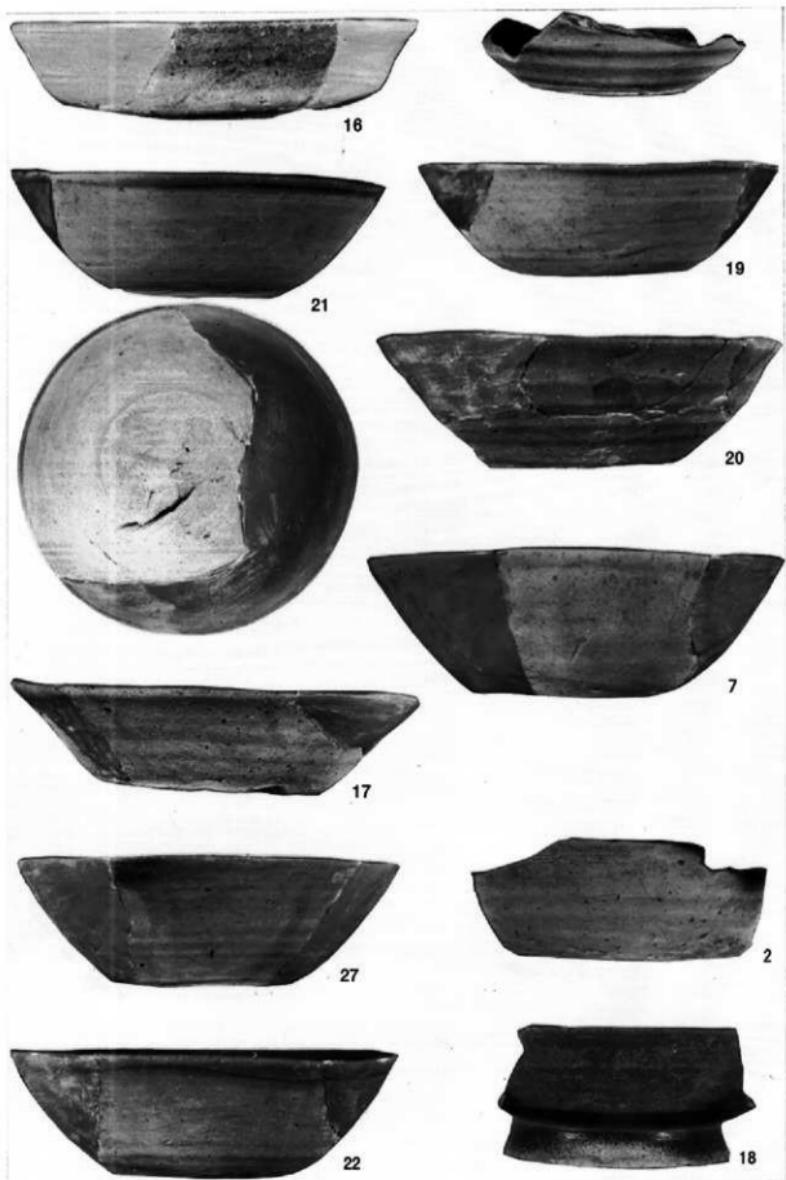


▲調査風景（東から）



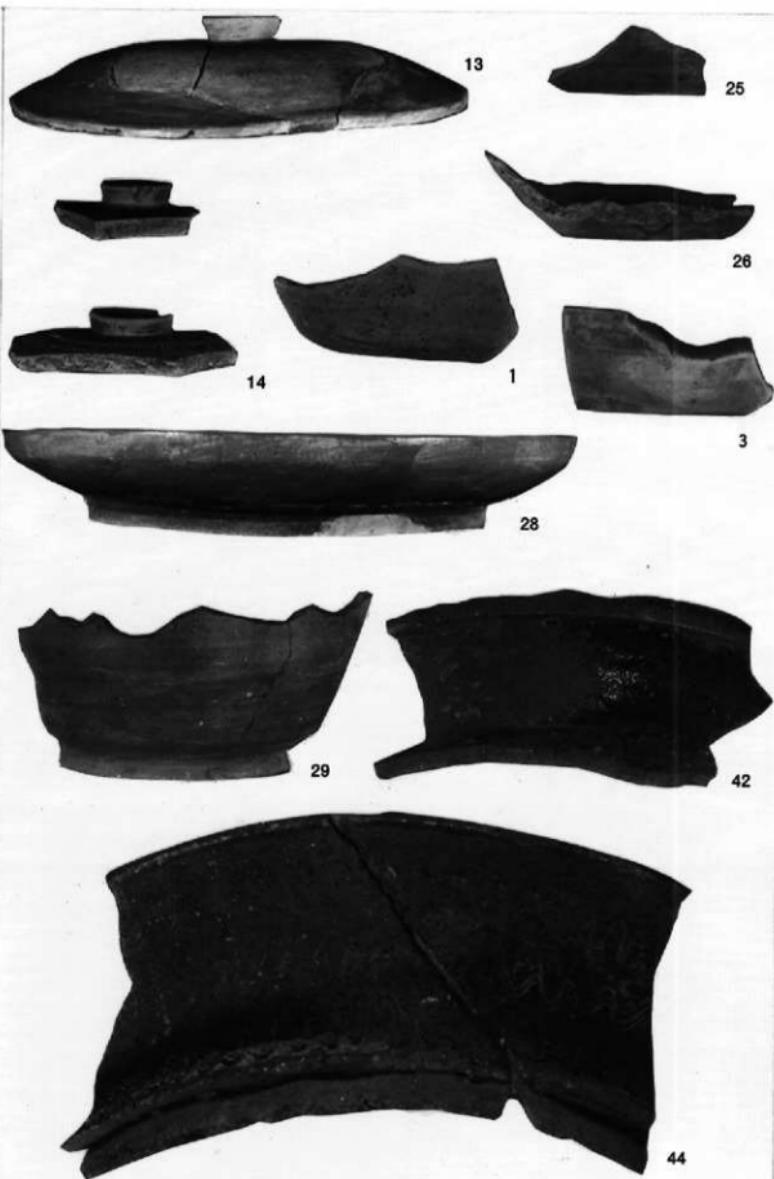
▲調査風景（南から）

第八図版
大浦A遺跡出土遺物(1)

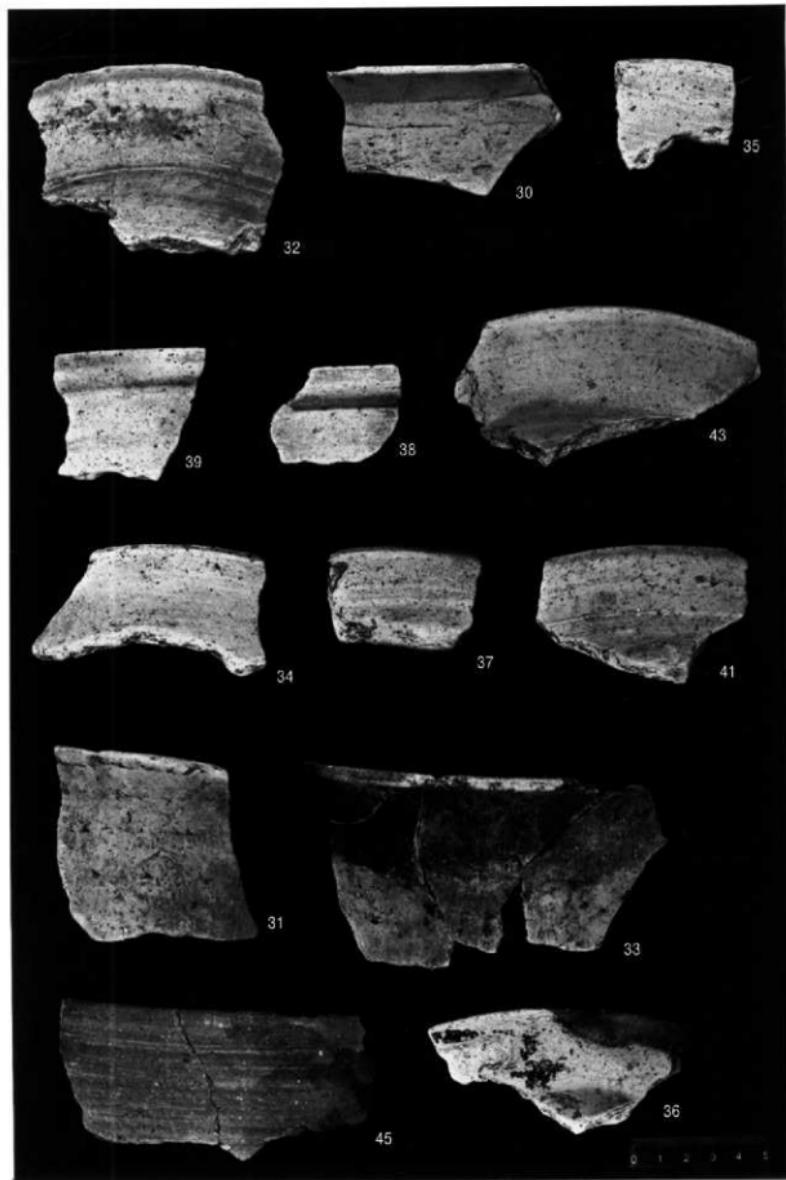


第九図版

大浦A遺跡出土遺物(2)



第十圖版
大浦A遺跡出土遺物(3)



報告書抄録

ふりがな	おおうら大いせきはつくつちょうきほうこくしょ
書名	大浦A遺跡発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第59集
編著者名	月山隆弘
編集機関	米沢市教育委員会
所在地	〒992-0012 山形県米沢市金池三丁目1番55号 TEL 0238-22-5111
発行年月日	西暦1998年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおうら A 大浦 A	やまがたけんよねざわ 山形県米沢 しなかたまち 市中田町11 -7	6202	224	37度 55分 5秒	140度 7分 37秒	19960819～ 19960910	400	店舗新設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大浦 A	官衙跡 集落跡	奈良・平安 中世	竪穴住居跡 掘立建物跡 土壙 柱穴など	3棟 3棟 4基	土師器・須恵器・赤焼土器

米沢市埋蔵文化財報告書 第59集

大浦A遺跡
発掘調査報告書

平成10年3月25日 印刷

平成10年3月30日 発行

発行 米沢市教育委員会
米沢市金池三丁目1-55

TEL (0238) 22-5111

内線7504

印刷 梅青葉堂印刷
米沢市下花沢三丁目8-50

TEL (0238) 21-2366

FAX (0238) 21-1776